

エッセー集「我が心の博多、そして西鉄ライオンズ」

あの時代にあった、人間のにおい

近況往来

演劇プロデューサー

岡田潔さん

昭和30年代、博多の路地裏に暮らした人々の表情の何と豊かなことか。演劇プロデューサーの岡田潔さん

とも懸命に生きる市井の人々との心の交流を描いている。

(66)『東京都』は、高校を出るまで過ごし、「記憶じやなくて体に染み付いている博多」を、エッセー集『我が心の博多、そして西鉄ライオンズ』につづった。

「粗雑かもしれないけど、皆おおらかだった。今は管理されて整理整頓され、窮屈になりすぎている。だから、あの時代にあったような、人間のおい、人間の体温が欲しいと感じるので

しよう」

当時、西鉄ライオンズは日本シリーズ3連覇前後の絶頂期。キョシ少年は平和台球場の外でラムネを売り、時にはフェンス越しに観戦しようとする人たちに台となるリング箱を売った。△ライオンズの周辺に

先日、紀伊国屋演劇賞や千田是也賞を受けた演出家、中津留章仁さん(39)は、大分県津久見市出身は、岡田さんが主宰する演劇事務所「トム・プロジェクト」で演劇を学んだ。「この本のことを映画にしたい。中津留君に脚本を書いてもらって」。博多にもあった「夢見る力」は健在だ。

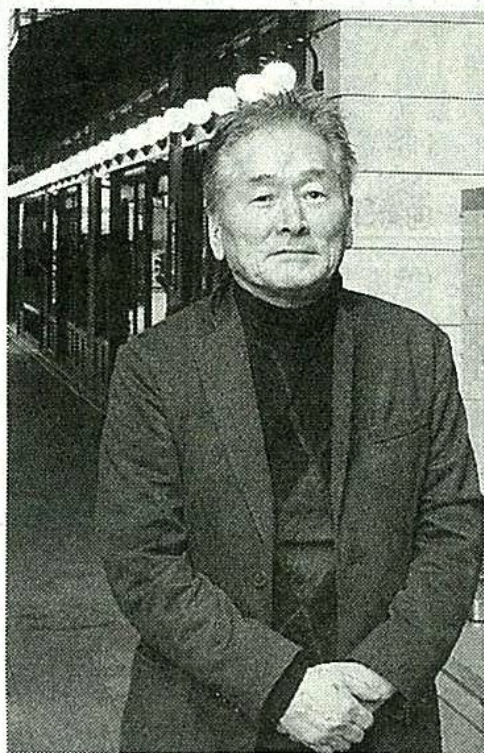
「テレビもインターネットもなかったから、みんな球場に集まる。そこで感動

た」と書く。

「テレビもインターネットもなかったから、みんな球場に集まる。そこで感動

た」と書く。

遊郭の女性たちの使い走りしながら銀幕の世界を目指したトモちゃん、多羅尾伴内の物まねがうまい鉄くず屋の松ちゃん、女湯をのぞかせてくれる風呂屋のヨシさん。現在のJR博多駅の近くにあった長屋に住むキョシ少年と、貧しく



◇岡田潔著『我が心の博多、そして西鉄ライオンズ』は海鳥社刊、1680円。

(野中彰久)